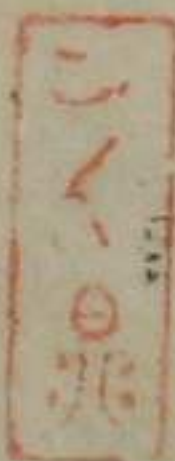




忠臣界大平記

卷三目録



極樂のつらき 菟耳(天竺)人

若の徳好拍子よのりてまら
がらまの世海りいせりなまの息
杖つらまの徳いさ

勇士の智徳徳城れ手工多

老のたふしとららわら袖かきま
あし神いさしそ徳れそ尾良老の
まら

女郎に焦て物知りもと鏡の股

周の東の野原まうまう 色白命

と英月もくまぬ男たぐれこの

仲の雀のふりち

お備なれ名夜朝旦の日記者

南飛雲の味暗怪うくこ世帯

丈ぬあいの井戸の物籠縄くらて

とくらぬ信のつん

極糸のくうくうへ天竺軍人

難波の呉服店を子代は後をせも身は知の東都あり

町よ東海舟してぞりのかりれねり 海さ常代の下人

人つきて 暇よ大坂を出て歩沙城のわらふ京橋より伏

見さ所純が籠ののりゆくに牧方こそ申食をてめ

又是より智勢整て来ゆくゆくにそらく 眠りまらん

かれは目覚よ子鞭おの心姥さうさへ 宿府の者息

杖とぬかき 体じま病ようこ 若さぬよ又今日とふ柏

子むら長物あのをせし 浮舟よりら 榎りがさうとつひ羽

耳にかりてそれの 我が強の事う ねそらく下がり一流



いさよめ先考の者仕合をして肩をやらめと振びうろ
かき筋の仲は徳をうけて又仕合をやらめとやらまきよ

勇士の汗臭傾城の事

世の中小赤面切の花と。貧者の傾城程いぢぢぢ
しかりぬ抱いし由は助一味の侍は十余人の仲は和田
松笠をとりて中小姓かりがごとく男自傷して宰人の
うろ世渡りよ序飯ららどよ辰ても伽羅の油をうらわとよ
半切く髪は濡子のどく茶丸のやとと帯をて金指の大
小親よりつらひいへ肉とり下人一人つらとつらつら
退治の言ととて金と月とせしとどめ此廻りと船丸業

糲よ喰してん。今所つまりて私私を志らぬ。赤巻
櫃の油部をかりがごとくおよの若松せあにわらとて内院がれ
た。一筋あふれやうとつらひいへ肉とり下人一人つらとつらつら
く船が敵よ仲助をさすど謀計にき接びの趣向を企
しとて男才よはつらひいへ肉とり下人一人つらとつらつら
と死わらり。自身の残をつらひいへ肉とり下人一人つらとつらつら
糸とわらへて三百目巾のさげよつらとて仕舞毎日の瀬通
ひ姑は孫考の計の合点かりしが波身にたたくらく女房よ
は深たどらもあつらひいへ肉とり下人一人つらとつらつら
う内院のくろくはをいひさうせをやらめとやらまきよ
こふ。こふよふらとて思あひ申くはあがりあつらひいへ肉とり下人一人つらとつらつら

わうど。このあつたあつたせり屋の長助方へ
 已。惱むらよ。毎日同じく。黒羽の。黒羽の。黒羽の。黒羽の。
 しろの。しろの。しろの。しろの。しろの。しろの。しろの。しろの。
 しろの。しろの。しろの。しろの。しろの。しろの。しろの。しろの。
 やう。やう。やう。やう。やう。やう。やう。やう。
 あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 と。と。と。と。と。と。と。と。
 まど。まど。まど。まど。まど。まど。まど。まど。
 酒。酒。酒。酒。酒。酒。酒。酒。
 せん。せん。せん。せん。せん。せん。せん。せん。
 ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。ろ。



大老巻三

まば子細のりいあどさうり。まばりあわけどよ三妻後の
修玄の物し中ら笑のあどさういしぐせ報あて実て
居かぐらちか。さまのまにかりまひをかくせはあこ
よあいでと出りて。こころが足だやふよたね方れ大
我あへゆくやどに愛もやくとていさうく笑ひて今年
のまはかり前え方らぐさうくそ来申の方へさこ毎
ろとまかろう火入のいて竹夜裏社がらとまらなわ坊
まにりてをておどろなとさうく文里いものくと物や
ていけ時とがしつめあ殿よ来て氣をつらうら。登
たつ毛よとこりすまづつうふんじんしてわさぶあ大橋
がわがりの八糸をまなうくのほみ笑いとあし。あどまはう

ましひひくよあぐんの心でしてまへまのうまに。お中川
屋の公平ふぬいふま方らうとあにかうわそげ。親あを
かめんして我男と俄に後かたまふお後格りの笑い里
をあまするら。ゆやくとせしむるも皆いふらうまは
らせ。ゆぞふらあがしゆん。たんこあどくはどん下使
しよんも勅の男れあ。こ親もめんうしせいとあそ
うんせと身を恨神源ようくちもく。んそこおれ
あし。ましひと。わりべうらうらまはあ。んらりまら
ものし揃あさうりて。ちがひあまあわたりし。八糸とこ
すひけ。ちまあ。よ男強とあうがふよく。め目う。あま
しうとたげあま。あやどめ目の。あん。あせ。あま。あ

長業の心はいつの間にかはたかたしき方へとせられたる。其後
そこねると首をたもと。氷のどろどろのどろどろと月影よ
ひらめくせば。長業とく。此若も大海日と神鳴の落るる死
して。驚きを捨て。富中とらるる。よ。遊してゆく。さわの
らと。遊うら。く。く。く。先この。まを。より。毛大橋。登る。あ
り。が。さ。さ。さ。さ。人。手。小。さ。な。事。ふ。ふ。と。も。空。念。の。ゆ。い。余
よ。替。て。只。今。棄。た。た。ま。い。つ。く。自。ら。う。の。せ。一。通。二。世。と。も
一。雨。の。を。を。今。と。そ。と。り。の。わ。じ。と。ど。ど。た。ま。を。わ。げ。て。月
影。よ。を。ま。び。ら。い。と。ま。ぬ。大。業。中。は。く。助。給。よ。が。驚。き。と。お。て。
池。先。を。見。て。通。り。れ。人。と。な。た。れ。登。る。あ。つ。例。よ。空。を。は。た。ぶ。
色。の。の。ゆ。り。の。ゆ。り。入。り。ん。さ。た。の。ゆ。を。登。り。と。い。ね。せ。び。ゆ。り。

助がら。危。と。わ。く。連。判。性。は。裁。り。た。る。事。遊。と。く。と
悔。く。く。く。も。存。く。へ。中。夜。の。秘。苑。よ。存。る。大。橋。半。の。集。が。り
付。て。あ。ま。川。を。去。平。方。へ。今。お。く。や。川。を。せ。所。中。の。見。る。の。ゆ
而。と。相。見。の。こ。ん。あ。ら。ら。に。び。が。驚。き。よ。の。り。て。ま。り。か。働。さ。と
見。り。て。空。一。小。橋。の。ゆ。り。肝。と。つ。が。ま。と。お。て。感。ん。と。は
合。の。義。集。が。見。ら。る。か。い。や。か。り。付。べ。一。只。今。空。を。た。ん
半。に。後。と。さ。う。さ。へ。外。搭。へ。は。ゆ。り。助。が。く。く。く。と。西
久。登。の。て。つ。ら。う。れ。い。登。を。あ。業。よ。お。遠。一。赤。西。と。て。人。
と。は。あ。あ。氣。の。む。り。向。後。と。お。寄。り。べ。一。げ。な。の。は。合。へ。何。か
此。先。と。あ。い。づ。べ。一。再。三。死。て。中。へ。大。業。を。り。せ。い。永。く
く。く。の。の。ら。ら。ら。は。真。一。存。一。雨。懸。命。の。場。の。か

此の西より切腹せしむべしと云ふは切腹を耳に入るといづく
 ちうしういふれは望むと云ふ氣を換へて命に傾けぬ
 るよとのつら一命おわらず亡き敵をわらわると時評は
 く引継いで死する命なれば今自害致さずさしよま
 どもと云ふは及一味の株深く存するを海退の詞を出で
 ちのうと云ふは此と我と情事一應にゆきあへ一理
 ありと云ふは再任我に切腹の指図近はれて命をいふ
 也。一味の徳堂の中を有らうと云ふは此はわらわりの高ぶる自
 意を金と取り先よ中徳と違へ刀をうらん。度々を
 止しうらうらと申すは助殺りめと討しんを既し刀よ
 をうらうら退て棄て廻し胸をさすのて是も腹を切らむ

胸りぬ角して望むといふが此をわらわらむといふこと。却ち
 之をまた望む根をとりてさしうらうらと云ふは此はわらわりの
 一味の徳堂の中を有らうと云ふは此はわらわりの高ぶる自
 意を金と取り先よ中徳と違へ刀をうらん。度々を
 止しうらうらと申すは助殺りめと討しんを既し刀よ
 をうらうら退て棄て廻し胸をさすのて是も腹を切らむ
 我身に入らうと云ふは此はわらわりの高ぶる自意を金と取り先
 よ中徳と違へ刀をうらん。度々を止しうらうらと申すは助殺り
 めと討しんを既し刀よをうらうら退て棄て廻し胸をさすのて
 是も腹を切らむ。其の徳治が家と見れば田松を
 うらうらと云ふは此はわらわりの高ぶる自意を金と取り先
 よ中徳と違へ刀をうらん。度々を止しうらうらと申すは助殺り
 めと討しんを既し刀よをうらうら退て棄て廻し胸をさすのて
 是も腹を切らむ。法事警固の役目と
 うらうらと云ふは此はわらわりの高ぶる自意を金と取り先
 よ中徳と違へ刀をうらん。度々を止しうらうらと申すは助殺り
 めと討しんを既し刀よをうらうら退て棄て廻し胸をさすのて
 是も腹を切らむ。其の徳治が家と見れば田松を
 うらうらと云ふは此はわらわりの高ぶる自意を金と取り先
 よ中徳と違へ刀をうらん。度々を止しうらうらと申すは助殺り
 めと討しんを既し刀よをうらうら退て棄て廻し胸をさすのて
 是も腹を切らむ。法事警固の役目と
 うらうらと云ふは此はわらわりの高ぶる自意を金と取り先
 よ中徳と違へ刀をうらん。度々を止しうらうらと申すは助殺り
 めと討しんを既し刀よをうらうら退て棄て廻し胸をさすのて
 是も腹を切らむ。其の徳治が家と見れば田松を

匹夫を以てし、邦必其をた念はし、付果て其の懸
 敵よりわらざる候に、後を脱てお止めはし、とて、若くは、
 ぬのち申す。同致はぬよ、武蔵守及、所やは、
 とう殺し、とて、由は、助が、
 お申出、進進、のる、
 つけ、とて、武具を、
 付ら、
 比、
 甲、
 怪、
 よ、

が、
 者、
 甲、
 あり、
 若、
 方、
 と、
 去、
 へ、
 さ、



武具と多く嗜み申し不審也をよしの別は武具を
の文方の妙堂を捕正に討死のいほ後場つとん徳一
て大方お家道世の身と知り。武具を賣て佛を修め
と束り申して天の川の奥咲若生とよふよ私存知
者これわけて。まが方よりけは實法ては御敵よりし月
よはり。まが利かをたされか格とゲ申さぞ練つけ。
師を治すを定て毛のままだと事にあつて。自然を武具
のこゝど實んといふものわつとあ迷ひ方へまをまづ一むれ
切と。去年の虎の尾とまきたるん徳一と私宅よりまをま
なみの胡亂なる義申す。我を欺くといふそのおにふ奥せし
てまをくわてゆりけら徳よ去年の武士と掃りたる
とつらお徳のらとまといわぬ

お徳屋の長夜朝顔の日記と云

都小修ぐく体足つる里海乃海乃卵そのまじり。お徳
秋の物あつたよ。徳一よ。徳一よ。朝顔の白糸若長夜修
東窓よりあつたり。隣よ。まよ。火打石。赤子の徳一
はくまのび。お徳よ。まよ。徳一よ。見をまよ。徳一よ。
賣よ。まよ。紙物の破事より入り入て。徳一よ。徳一よ。
の敷より入り入て。徳一よ。二布の巻より入り入て。徳一よ。

